岡山大学
埋蔵文化財調査研究センター報
第 16 号

1996年10月　発行

岡山大学
埋蔵文化財調査研究センター

〒700
岡山市津島中３丁目１番１号
TEL・FAX(086)251-7290

貯蔵穴調査風景と出土編み物（津島岡大遺跡15次調査）

津島と鹿田の4000年

4000年っていわれてもどのくらい古いのかピンとこない、という方も多いでしょう。でも、とにかく岡山大学のキャンパスの地下には明治から縄文時代まで、過去の地面が何枚にも重なっています。そこに川とか水田、住居やお墓の跡などが埋もれているのです。

地層を上から下へ発掘し時間をしだいに古い方へさかのぼっていくと、私たちがふだん使っている物の形や作り方がどんどん変わっていくことに気づきます。瀬戸物が土器に、高い屋根の家屋が竪穴住居へ、といったふうにです。生活の移りかわりの過程がわかれば、４千年だって１万年だって、あんがい身近に感じられるのではないでしょうか。

11月14日から３日間、学生会館をお借りして岡大キャンパスの発掘成果を展示することになりました。この機会に足元の昔を実感し、当センターの日々の仕事にもご理解いただければさいわいです。　（センター長　稲田孝司）

岡山大学埋蔵文化財調査研究センターも来年は早10年を迎えます。でも、岡大の構内遺跡？　岡大の埋文センター？？　と思っている方、多いのではないでしょうか。今回そうした疑問にお答えしようと思います。文学部と工学部の方々にアンケートをお願いし、その結果を参考にした「Q＆A」です。また、実物に接する機会として11月に展示会を開催します。このセンター報をもって是非お越しください。

Q．岡山大学構内には遺跡が多いそうですね。

A．はい。津島構内は津島岡大遺跡、鹿田構内は鹿田遺跡として有名です。岡大は遺跡の上に建っているようなもので、埋蔵文化財の宝庫といわれています。

Q．埋蔵文化財というのはどういうもの？

A．土の中に刻まれた人間の営みの痕跡でしょうか。住居跡のような遺構と土器・石器のような遺物を含みます。

Q．建物を建てるときはどうして発掘調査が必要なの？

A．埋蔵文化財は文化財保護法で保護することが決められています。建物建設などで遺跡をやむなく壊す場合は、原因者が調査するか、調査費を負担するシステムになっています。岡山大学では、施設建設の促進と文化財の保護を両立させるため、1987年に当センターを設置しました。

紹介します！　ここが岡大埋文センターです。

Q．発掘調査は時間と経費がかかり、工事が遅れると聞きますが？

A．学内の発掘調査は当初から建設計画の中に組み込まれ、事務局・関連部局と当センターの打ち合わせでスムーズに進んでいます。調査のために建物の完成予定が遅れた例は１度もありません。

Q．埋蔵文化財調査研究センターは学内ではどういう機関なのですか？

A．岡大の全学で活用・運営する共同利用施設です。

Q．運営はどんなふうに？

A．年間の発掘計画や予算は全学の委員からなる管理委員会と運営委員会が決定します。実際に発掘を担当するのは考古学が専門の調査研究員です。

Q．発掘調査や運営にかかる費用は？

A．発掘調査の予算は、基本的には建設費と一緒に文部省で予算化されます。センターの日常的な運営費は大学の予算に組み込まれています。

学　長

【管　理　委　員　会】
学長、各学部長、自然科学研究科長
資源生物研究所長、附属図書館長
各附属病院長、地球内部研究センター長
学生部長、医療技術短期大学部主事
事務局長、埋蔵文化財調査研究センター長

埋蔵文化財調査研究センター長

【運　営　委　員　会】
埋蔵文化財調査研究センター長、
学長委嘱の委員（文学部･経済学部･理学部・医学部・農学部　各１名）
センター室長、施設部長

調査研究室長

調査研究員（現在、助手５名）
補佐員(2 名)　・補助員(3 名)

＜岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの組織＞

Q．発掘調査以外にどんな仕事があるの？

A．発掘調査後の仕事が大変です。小さな土器のかけらにも多くの情報が隠れています。こうした膨大なデータを整理し、利用できるようにするわけですからとても時間がかかります。主な仕事を具体的にあげてみましょう。

悪戦苦闘の復元作業!!
パーツの足りないジグソウパズルだから難しい。

① 発掘データを報告書にまとめる。
洗浄：土のついた遺物を水で洗う。
注記：遺物に出土した場所を記入する。
復元・接合：破片をつなぎ合わせる（右写真）。
実測：図面に描いて記録をとる（下写真）。
写真撮影
できあがった図面をきれいに清書し、それに文章をつけて報告書を印刷します。

② 報告の終わった資料を活用しやすく保管する。
・出土品の標本作り…種子の分類など
・資料のデータベース化

さあ、実測！土器の形や特徴を図面に…。
不思議と当時の人の「技」も見えてくる。

③ 情報公開
・３種類の印刷物の発行を行っています。
発掘調査報告書：発掘調査の詳細な報告書
年報：年間の業務内容の報告
センター報：読み易い情報誌
・インターネット…より広い情報提供を開始。
・展示：センター内の展示室と事務局会議室のコーナーで実施しています。

Q．展示室は自由に見学できるの？

A．もちろん！　大歓迎です。センターの場所は４頁の図にあります。

「構内遺跡が一目でわかる」　展示室。
平日の９時～16時は自由に見学できますヨ。

Q．発掘調査は見学できますか？

A．はい。調査の終盤には、毎回、現地説明会も開いています。通常は、機械が動いていて危険な場合もありますので、見学の時には調査員に声を掛けて下さい。現在は４頁上図の「22」の場所で発掘を行っています。

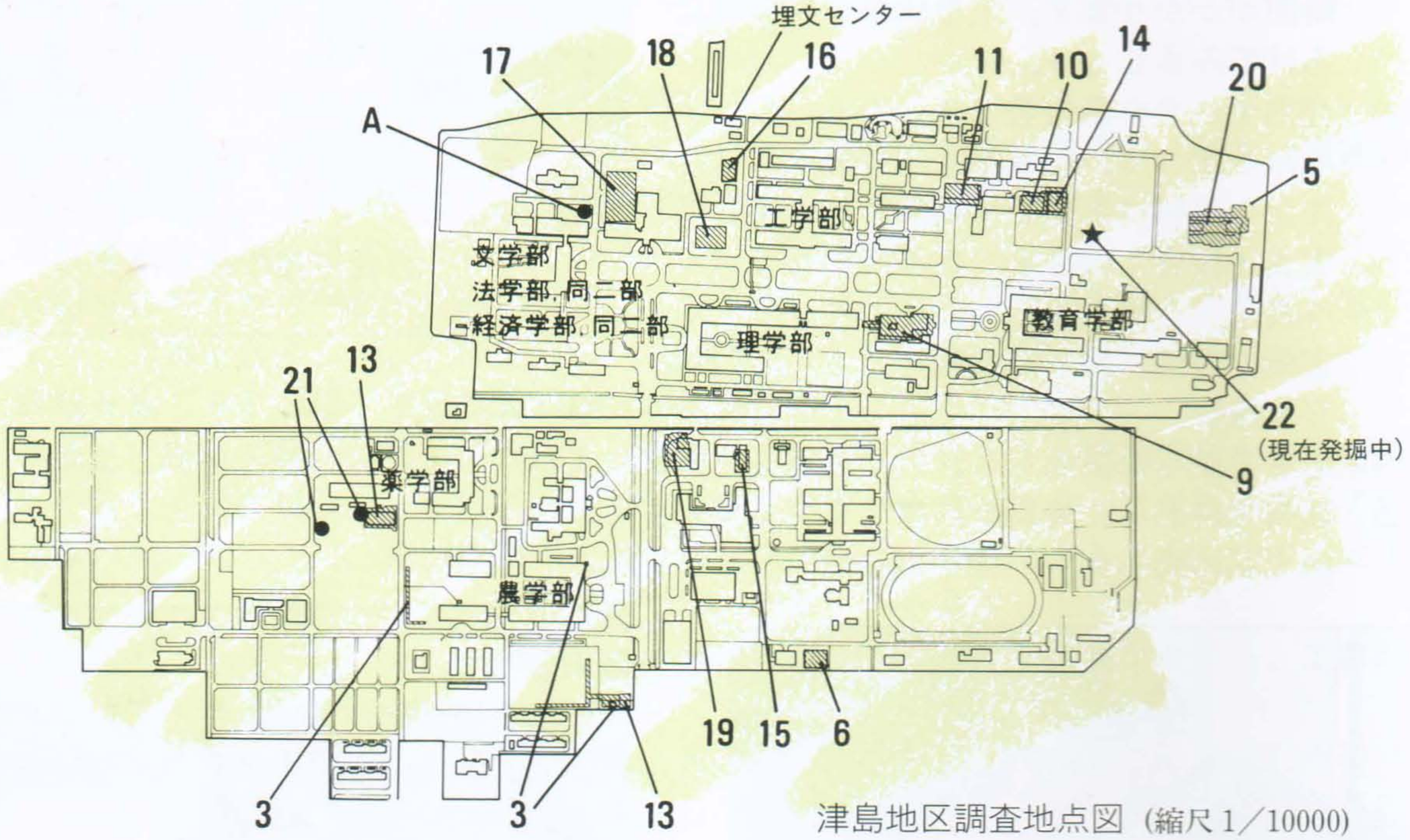
★★センター報を希望者の方★★
部数の限り内でさしあげます!!

Q．発掘調査は何件くらい行っているの？

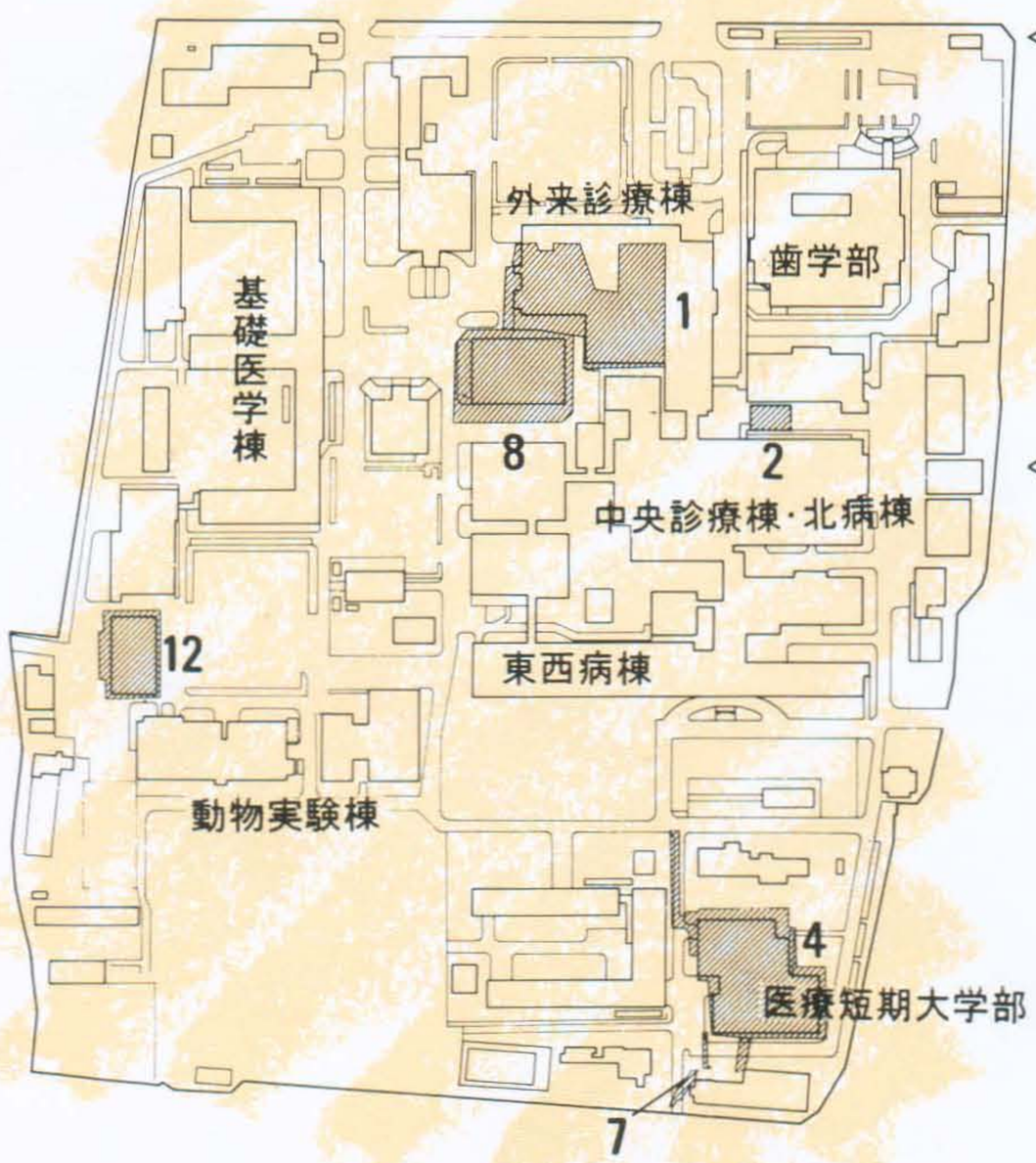
A．1983年から現在まで、津島岡大遺跡の調査が16回、鹿田遺跡では6回ですね（下図）。

Q．鹿田遺跡は少ないですね。

A．調査回数は少ないですが、出土遺物の量は多く全体の2/3を占めます。現在までの遺物量は、ケース（55×35×15cm）2000箱を優に超していますが。



津島地区調査地点図（縮尺1／10000）



鹿田地区調査地点図（縮尺1／5000）

【歴史】

＜1983年3月1日　埋蔵文化財調査室設置＞

1983年　1．鹿田遺跡1次調査（医病：外来診療棟）
　　2．　〃　2次調査（〃：NMR－CT室）
　　3．津島岡大遺跡2次調査（基幹整備）
1986年　4．鹿田遺跡3次調査（医短：校舎）
　　5．津島岡大遺跡3次調査（男子学生寮）
1987年　6．　〃　4次調査（屋内運動場）
　　7．鹿田遺跡4次調査（医短：配管）
　　8．　〃　5次調査（医：管理棟）

＜1987年11月27日　埋蔵文化財調査研究センターに改組＞

1988年　9．津島岡大遺跡5次調査（大学院自然科学研究科棟）
　　10．　〃　6次調査（工：生物応用工学科棟）
　　11．　〃　7次調査（〃：情報工学科棟）
1990年　12．鹿田遺跡6次調査（アイソトープ総合センター）
1991年　13．津島岡大遺跡8次調査（農・薬：遺伝子実験棟）
1992年　14．　〃　9次調査（工：生体機能応用工学科棟）
1993年　15．　〃　10次調査（保健管理センター）
　　16．　〃　11次調査（総合情報処理センター）
1994年　17．　〃　12次調査（図書館）
1995年　18．　〃　13次調査（福利厚生施設北）
　　19．　〃　14次調査（福利厚生施設南）
1996年　20．　〃　15次調査（サテライト・ベンチャービジネス・ラボラトリー）
　　21．　〃　16次調査（農・薬：動物実験施設関連）
　　22．　〃　17次調査（環境理工学部）

※番号は図の中の番号に対応しています。

Q．津島岡大遺跡で遺物量が少ないのはなぜ？

A．その違いは遺跡の性格の違いを示しているのです。鹿田遺跡は集落であるため生活用具が残りやすく、津島岡大遺跡は田畑であった時代が長いため遺物は少ないのです。「家庭と職場」の関係でしょうか。当時の社会を復元するには、両方を見る必要があります。

Q．津島岡大遺跡の調査ではどんな成果があがっているの？

A．一つは縄文時代の村の様子がわかってきました。食料を保存しておく貯蔵穴、住居、炉、と調理具、ドングリのような食料がいっしょに見つかっています。

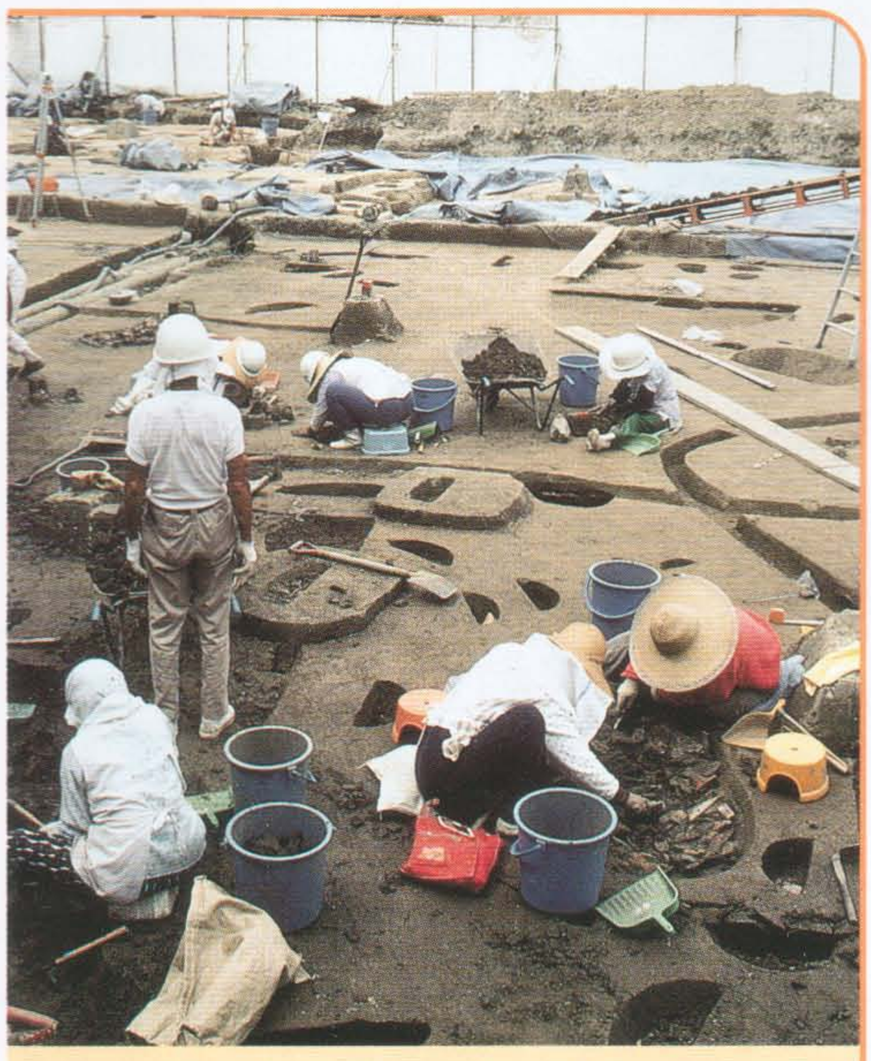
弥生時代の水田を掘る!!

水田の上を覆った砂を取り除き、小さな区画の畦を掘り出す。
津島岡大遺跡15次調査
（サテライトベンチャービジネスラボラトリー）の作業風景

二つ目は弥生時代からの水田の移り変わりと土地開発の歴史が見えてきたことです。はじめは土地の起伏に沿って屈曲していた水田区画が、平安時代には東西または南北に整然と配置されるようになり、時代を追って開発が拡大していく様子がわかります。

Q．鹿田遺跡はどうですか？

A．長い歴史の中には村の盛衰があるようで、次の４時期が栄えた時期でしょう。



弥生時代の村を掘る!!

穴の中から土器が…。興奮の一瞬。
今から2000年近く前の人々の営みがよみがえる。
鹿田遺跡１次調査（外来診療棟）作業風景

①弥生時代中期後半～古墳時代初頭
この頃に村ができたようで、住居や井戸、乳児の墓などが、多くの遺物といっしょに出てきます。当時の人々の日常生活ですね。

②平安時代
「藤原摂関家殿下渡領」として文献に名前が出てくる時期です。立派な枠をもつ井戸や大形の建物群が建ち並び、都の物や文字資料も多く、「鹿田荘」の関連で勢力のあった時期といえます。

③平安末～鎌倉時代
多くの井戸は村の広がりを示しますが、鎌倉時代はやや衰退気味であったようです。

④鎌倉時代末～室町時代初頭
村の拡大と合わせ大きな溝が出現します。当時の一般の村では手に入らない瓦・銅鋺・輸入陶磁器といった高価なものが増えています。村の性格に変化があったのでしょうか。

北に半田山、東に旭川、南には川が網目状に走る。豊かな水量。
後期の始めには土地の高まりができ、人々が村を作り始める。

4000年前の「衣食住」

食

獲　得

狩猟→石鏃（せきぞく）：弓矢の先端につける石製の狩猟具
漁撈→石錘（せきすい）：網の重りにした石製の漁撈具
収穫→木ノ実や根菜類

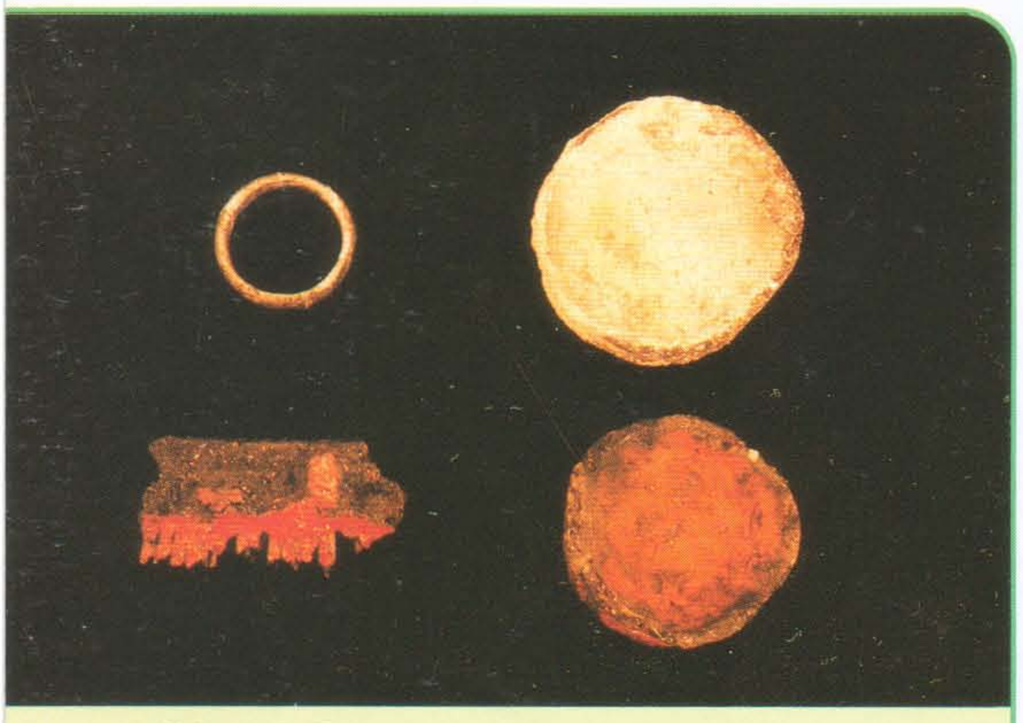
半田山での狩猟、南の川や海での漁撈。食卓に並ぶ豪華な肉・魚料理。しかし、それ以上に、貯蔵穴に蓄えられたドングリの多さ。毎年秋に豊かに実る植物が当時の食生活を支えていたあかしであろうか。採集に使ったカゴが貯蔵穴から顔を出し、洗練されたデザインを今に伝える（表紙写真）。

貯蔵穴からドングリの入った土器が出土!!
直径約1m、深さ60cm前後の穴に木ノ実が蓄えられるが、土器を入れる例は珍しい。
5次調査（大学院自然科学研究科）

保存～調理

貯蔵穴　食料を水浸けにして保存する。現在の「冷蔵庫」(上写真)。
炉　　加熱・煮沸による食料加工をした場所。
土器　　煤で真っ黒の煮沸具。現在の「鍋」。大容量で大量廃棄→まとめて調理される？。
石器　　石皿（いしざら）と磨石（すりいし）：食物をすり潰す調理具、現在の「すり鉢とすりこぎ」

秋に収穫した木ノ実は、長期間鮮度を保つため、水が湧き出す川辺や緩斜面に作られた貯蔵穴に保存される。それを炉にかけた土器で加熱調理。石皿・磨石ですり潰す。水さらしをしてアク抜きも行う。下ごしらえはまとめて…。こんな食生活が思い浮かぶ。



縄文時代の'おしゃれ'　3・5次調査
左上：石製指輪、左下：木製櫛、右：土製耳飾り

住

高い場所に多くの柱の穴や地面を掘り込んだ住居がある。直径5m。中にはよく使われた炉が残る。

衣

装身具：櫛・耳飾り・指輪(左写真)。

真っ赤に彩色された耳飾りと櫛。指輪はていねいに磨きあげられ光沢を放つ。

櫛……長い歯を上部で束ねて赤漆で固めている。
耳飾り…直径約3cm。耳たぶにあけた穴にはめこむ「ピアス」。
指輪……直径1cm。女性の小指程度の大きさ。以外に細くて華奢な縄文女性の手が見えてくる。

展示解説

土器に付着した炭化物（たんかぶつ）…ユリ科ネギ属の植物（ノビル？）が土器の内面に焦げついている。調理中のアクシデントでしょうかネ。

サヌカイトを入れた土坑（どこう）…香川県産サヌカイトの大形破片が5枚重なって出土した。一部加工したものもあるが、石器を作る材料として置かれていたようだ。

津島岡大遺跡の水田

展示コーナー③④

土地開発は弥生時代の水田に始まる。水田の変化は現在に続く土地開発の歴史でもある。

弥生時代

前　期　自然地形を最大限に利用。
水田の範囲は限られており、自然地形に沿って小さな区画で仕切っている(右写真)。

後　期　土地開発も進み、収穫量は増加する。
水田は谷部分にも広がる。用水路は大規模な主流と中小規模の支流とが整備される(下写真)。

弥生時代後期の大規模な用水路

幅10m以上、深さ1～1.5m。溝の底には土器や木製の農耕具が残っていた。　12次調査

最古段階の水田!!

洪水の砂を取り除くと弥生時代の畦が姿を見せる。3cm程度の高まりである。水田の広さは一辺2～3mと驚くほど小さい。　12次調査（図書館）

平安時代

水田の区割りが東西南北に変化
→土地造成が進み区割りがやり直される。
用水路の整備：随所に設けられた杭列や分流によって、水田への取水や排水のための水利調整がなされる。

室町時代

周辺の古墳の破壊が確認されるほど、広範囲に土地開発が行われる。

◆◆◆　縄文時代の稲？？　◆◆◆

近年、その存在を示す資料が報告されています。

岡山県総社市の南溝手遺跡では、籾の圧痕が残る縄文土器が発見され、津島岡大遺跡でも縄文時代後期の土器片の中に稲のプラントオパールが見つかりました(5次調査)。土器を作った土に稲が入っていたのでしょうか。

ホットな議論が展開しそう!!ですね。

《展示会開催のお知らせ》

岡山大学構内遺跡第3回展示会を津島キャンパスにて行います。
日程：1996年11月14日(木)～16日(土)
時間：9:00 a.m.～16:30 p.m.(入場)
場所：岡山大学学生会館2F
音楽鑑賞室と北集会室

展示解説

プラントオパール…イネ科の植物の化石といえるもの。
人形木製品(ひとがたもくせいひん)…人間の形をかたどった木製品。「お払い」など祭祀的行為に使われる。
条里(じょうり)…古代の農村の土地区画。東西南北を碁盤目状に区切り、○条○里○坪と地番をつけた。
埴輪(はにわ)…古墳の周囲に立てられる焼き物。岡大では室町時代の造成土に混ざっており、古墳の破壊があったらしい。

鹿田遺跡の弥生時代

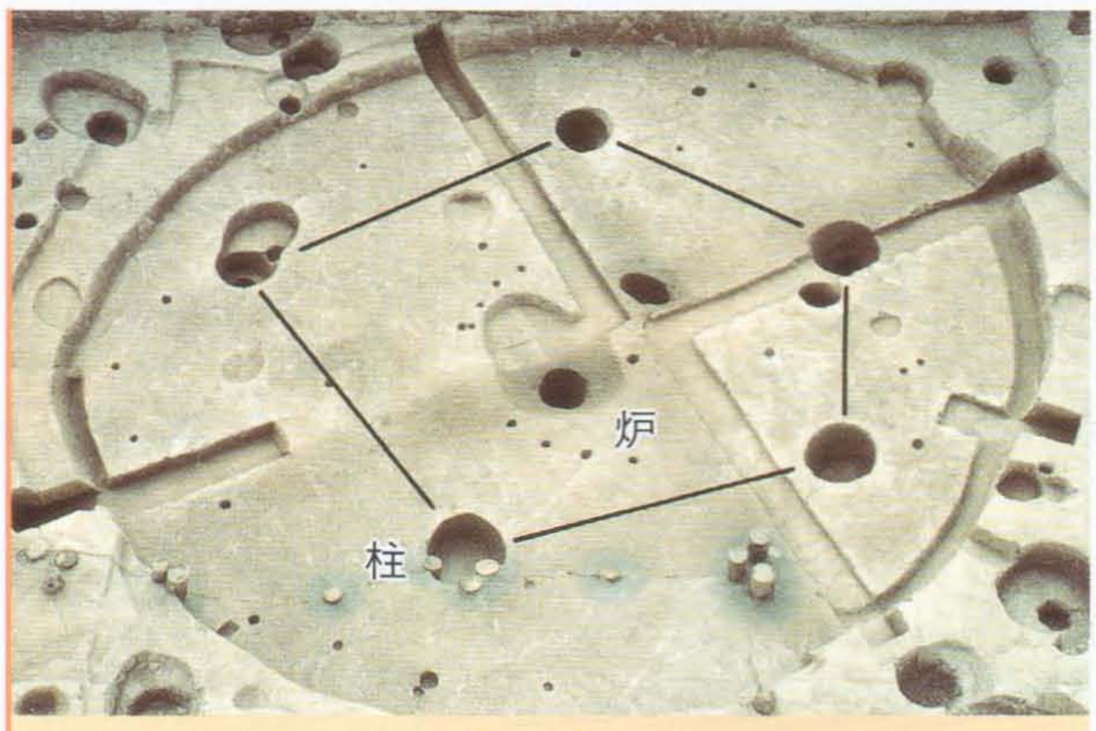
展示コーナー③

弥生時代中期後半、岡山平野の南端、
海に程近い砂州上に村ができる。

家　地面を掘り込んでつくる竪穴住居。25棟が見つかっている。中央に炉をもつ。

井戸　20箇所発見された。非常に深くて、湧き水も豊かである。埋めてしまう時の「まつり」の跡が残ることがある。

墓　壷棺（つぼかん）が3箇所見つかった。大形の壷に鉢で蓋をした棺である。中に乳歯が残るものがあり、乳幼児の墓であることがわかった。大人の墓は村内にはない。



円形の住居　1次調査（外来診療棟）
直径6.3mに地面を掘り込んで床を作る。5本の柱を建てて、藁葺（わらぶき）の屋根をのせる。

食生活　作物が出土する…米・瓜（うり）・桃など

道具：＜農耕具＞稲の穂摘（ほつ）み具の石包丁（いしぼうちょう）
耕作用の木製の鋤（すき）
脱穀用の砧（きぬた）など
＜漁撈具＞石錘（せきすい）や土錘（どすい）が多い。
＜狩猟具＞石鏃（せきぞく）が少量見つかる。

調理具：真っ黒に煤けた甕が多い。「鍋」である。

こうした道具から、当時の食生活の中心には農耕があり、そして盛んな漁撈や狩猟も続いていた、そんな様子がわかる。

手工業　塩作り容器の「製塩土器（せいえんどき）」や「ガラスの屑」から、小規模な手工業が予想される。

交流と緊張　出土する各地の土器（四国・近畿・山陰）は友好関係、武器は緊張関係を示すのかもしれない。

そして、突然、村は古墳時代初頭で姿を消す…。

井戸に埋められた土器。なぜ？
多くの完形の土器が置かれる。
→「マツリ」

当時の人が使用していた状態の井戸
直径150cm、深さ200cmで湧水はとても豊か。
1次調査（外来診療棟）

展示解説

分銅形土製品（ぶんどうがたどせいひん）：具体的な用途はまだ不明確だが、祭祀的性格が指摘されている。
製塩土器（せいえんどき）：濃度をあげた海水を煮つめて塩をとる容器
木製短甲（たんこう）：鎧（よろい）の前の部分。胸部には見事な文様がきざまれる。黒漆仕上げである。
木製盾（たて）：長方形の板を綴じ合わせて作る。その「綴じ穴」がよく残る。

鹿田遺跡の平安時代

展示コーナー④

都の香り、人でにぎわう村。有力貴族藤原氏の荘園として栄える。

建物　庇(ひさし)つき建物を含む大形掘立柱建物が9棟。

井戸　3基。大形の枠を有す（下写真）。

橋脚か桟橋　大形の杭列が並ぶ。

→人・物資の盛んな往来＝盛んな経済活動

使用品　赤い土師器(はじき)や黒色土器(こくしょくどき)、石帯(せきたい)は都との強い関係を示し、硯(すずり)、木簡(もっかん)や墨書土器(ぼくしょどき)は文書作成を予想させる。

祭祀具　井戸に斎串(いぐし)・櫛(くし)・刀子(とうす)・曲物(まげもの)

：都での儀式の道具に共通

存続時期　9世紀を中心に

遺跡の性格　「鹿田荘」形成期の荘官の居宅地の可能性が強い。

※「焼き討ち事件」の頃（10～11世紀前半）の遺物無し→集落の中断＝移動？

大形の建物と井戸

右には正方形の穴に円形の柱穴。3間×2間の建物の跡である。左には大形の井戸が見える。1次調査(外来診療棟)

文献資料

9世紀代　藤原氏殿下渡領四ヵ荘の一つとして重要な行事に年貢を頻繁に納めている。

→摂関家の藤原氏に受継がれる由緒正しい荘園。

958～986年〈備前国司と鹿田庄司の争い〉

986年焼き討ち事件：「3000余戸破壊」「米320石略奪」「庄司の館焼亡」

→人口集中や年貢米の集積があった。

998年　鹿田荘の別当の舟で作州の物産を上方へ輸送

→経済活動の拠点として港湾都市が形成されていた。

非常に大形の井戸　直径3.6m、深さ3.6m

底面には水溜部の掘り込みが一段あり、そこに井戸枠（残存長2.4m）が入る。井戸枠は径1m以上のスギの大木のくり貫き材を合わせている。ていねいな面取りがある。

平安時代の道具

1～3次調査

展示解説

丹塗土師器(にぬりはじき)…赤い軟質の器

黒色土器(こくしょくどき)…黒い軟質の器

石帯(せきたい)…官位を示す石製のベルト飾り

木簡(もっかん)…文字を描いた木札

墨書土器(ぼくしょどき)…文字を書いた器。「専」「玉」「田」などがある。

斎串(いぐし)…木製の薄い板。下端が尖り、上端には切れ目が入る。祭祀に使用される。

転用硯(てんようけん)…須恵器(硬質の焼物)の蓋の内側を硯に利用したもの。

鹿田遺跡の鎌倉時代

集落の拡大と盛衰

村の構成　中小規模の建物15棟と24基の井戸。
14世紀には大規模な区画溝が作られ、
再編成が進みます。

物資の流通　14世紀に大きな変化があるようです。

＜他地域の土器＞

- **瓦器(がき)椀や皿**…近畿産
- **須恵質の鉢や甕**
  …13世紀は東播系(兵庫南部)や亀山焼(備中南部)
  →14世紀は備前焼(備前南部)がシェアを拡大
- **輸入陶磁器(中国産)**…14世紀に良質品の増加

＜地元の土器＞土師質土器…椀(わん)・杯(つき)・皿(さら)・鍋(なべ)・竈(かまど)

白い碗・椀!!　白磁と土師質土器

白磁は中国産の高級品、土師椀は地元産。どちらも白い器です。地元でまねて作ったのでしょう。

多様な木製品　下駄(げた)・杓子(しゃくし)・曲物・箸(はし)・皿・遊具など現在に通じる様々な日常具があります。

特殊品　瓦(かわら)・銅鋺(どうわん)・板碑(いたび)（14世紀）→一般の村では見られない品々でしょう。

祭　祀　井戸から出土する牛や馬の頭骨が目を引きます。

遺跡の性格　**11～12世紀**　周辺遺跡で例のない遺構密度の高さと高級品→人口集中と商品流通

13世紀　周辺遺跡が激増するなか，遺構密度はやや減少気味で、遺物の量・質とも貧弱→衰退

14世紀　大規模な溝で敷地はしっかりと区割りされた状況や、瓦や板碑などの特殊品や輸入陶磁器や銅鋺などの高級品の増加から、瓦葺き建物を持つ強い勢力の存在が予想される。

→「寺」？のような性格が浮かび上がる。

文献資料

「備前国荒野荘絵図」(大宮文書）1300年
“市”“鹿田庄”“鹿田河”の文字が見える。

組み合わせの木枠をもつ井戸と出土した牛の頭

一辺95cm、深さ2m の四角形の井戸(左写真)。底には、牛の頭骨(右写真)を逆にして置き、四隅に小皿が差し込まれていた。埋め戻す際の「まつり」の跡。　5次調査（管理棟）

展示解説

銅鋺(どうわん)…銅製のお鋺。仏具に多く用いられる。

板碑(いたび)…墓にたてる塔婆の一種。板状石材の頂部を三角形にし、その下には段がつけられる。鎌倉時代以降出現する。

遺構・遺物の保存処理

展示コーナー⑦

発掘調査中に特に貴重な遺構は切り取って補修します。
木質や植物質の遺物は薬品で保存処理を行います。

遺構の保存処理を紹介しましょう。

（いずれも津島岡大遺跡です。）

【縄文時代の貯蔵穴の底に残った編み物（6次調査）】

植物質で非常に薄い編み物の取り上げと保存のため、貯蔵穴の底の土ごと持ち帰り、全体を樹脂(PEG)で固めます。こうして、編み物が出土した状態のままを見ることができます。

【縄文時代と古墳時代の炉（7･10次調査）】

炉は土がよく焼けて硬くなっているため、周囲の周囲の土ごと切り取って移動できます。ただし、非常に重いため、できるだけ土を削りとり、軽くして（右写真）から、発泡ウレタンで補修します。

古墳時代の炉の修復作業風景
余分な土を削り取ってダイエット中！

【断面土層の剝ぎ取り（12次調査）】

土の堆積状況を写真や図面だけでなく、実際の土を剝ぎ取って保存する方法です。薬品を土の壁面に塗り、布を張り付けて土の表面の皮一枚を剝ぎ取ります。

次は、遺物の処理です。

自然状態では金属器はサビ、木製品は乾燥で壊れてしまいます。岡大では、溝や井戸に農耕具など様々な木製品が、貯蔵穴では編み物が水浸け状態で良好に残っています。これらの中でＰＥＧ処理法が可能なものの保存処理を進めています。

ＰＥＧ処理法

木製品の中に含まれている水と樹脂の一種であるポリエチレングリコール（ＰＥＧ）を、置き換える方法です。最初、40％程度のＰＥＧ水溶液の中に木器を漬け込み、１～1.5カ月ごとに濃度を上げて100％になれば、完全に水分が除去されて完成です。薬品は50～60℃で融けるため、大形の水槽で加熱しながら１年～１年半かけて徐々に変化させます。

そのほかに、水分をアルコールに置き換えていく方法も非常に効果的です。

保存処理作業風景
水槽からの木器の取りあげ！
期待と緊張と不安の一瞬です。

よみがえる縄文時代の集落

津島岡大遺跡第15次調査
（サテライトベンチャービジネスラボラトリー）

発掘地点は津島構内の東北隅、馬場の東側。８年前の調査地点を拡張しての発掘です。１～４月の発掘期間中に、弥生時代の初め、本格的な稲作が開始された頃の非常に古い水田や用水路、さらにその下からは縄文時代の村が見事に姿を現しました。特に、縄文時代の人々の生活の跡は、これまでになく良好といえるでしょう。今から3000年～4000年も前のことです。

縄文時代の冷蔵庫　－木ノ実の貯蔵穴－

直径約１m、深さ0.5～１mの穴が、縄文時代の川岸にずらりと並んで姿を現しました。今でも水が激しく湧き、中には水に浸かったドングリやトチが残っています。当時の重要な食料源として、収穫の秋に大量に採集された後、冷たい新鮮な水の中に浸けて生保存していたのです。「天然の冷蔵庫」ですね。カゴのような編み物を敷いたりしていることもあります（表紙写真）。こうした木ノ実の多くはアク抜きが必要です。そのためにもこうした保存方法が有効であったのかもしれません。縄文人の様々な知恵が偲ばれますね。

縄文時代の住まい　－住居と炉－

直径４～５mの円形の掘り込みが見つかりました。残っていた深さは30cm程度ですが、本来はもっと深かったでしょう。床面には中央から少しはずれた場所に炉があります。径60cmの範囲が非常によく焼けています。柱穴は３箇所確認されました。住居の跡でしょうか。岡山平野では縄文時代の住居はよく解っていません。こうした遺構の発見は、当時の集落の解明に重要であり、今後の調査に一層の期待をもたせます。

津島岡大遺跡第17次発掘調査中!!

去る５月21日から発掘調査を開始しました。津島キャンパス教育学部北の馬場の所です。11月頃には縄文時代の村が見えますよ。たぶん…。

《編集後記》

本号は展示会特別号で、これまでの発掘調査を中心とした業務の総括的な内容を目指しつつ、展示会のパンフレットという「二足のワラジ」をはいています。文章では分かりにくいかもしれません。ぜひ、展示会で実物をみてくださいね。

（山本悦世）